



久世乃次之備

初篇
中

1 本 5
415
2



清水濱
臣藏書



久保之取蛇尾目錄

蟬丸

歩行をめぐりくるとり

学様よねくし九まよひ

役小角

あきむとを何は役

かきくちまね

心のあきさきとり
俚諺雅證

あつう

あつう物

あつうは

あつう

あつう

君とつう

衣よれたたののこ
神の訓

笏の本

七位日記注誤

うらぬの梅をまきとよあつう
あつう

おろろあつう
雅記

あつう

あつう

あつう

墓所よてま履拾り

顔れふらこ

あつう

おもゆ

まもれこも

まよひ 字訓美

禁裏門松

躬恒

あきつ

ゆかりをれ誤

まがらこ

於人

人又夕をえ

まよふあつ

人をさしてあそこを云

みとご

あそびをれあつ

このくよ

あそびをれあつ

志やくむ

む人なむ

夜降つあ

なすこれとこをたあきふ

え良親まう

くろが乃骨れあつ

くらあそひ

あ

志のいそ

あかひれつら

まよふあつ

病仰ふ

耳をさく

掛店

なすく、かき

所狭而行向人少尔博雅先下人内所謂
等書而不思懸所為住京都居而過与加之土
目暗詠歌曰世乃中波土天毛加久天毛須久
志天牟宮毛和良也毛半天之奈計礼波土詠而
不答使者以此由云博雅思樣此盲目命在旦暮
我之壽雖不知尚流泉啄木云曲者此目暗耳社
傳奈礼相構天聞彈欲傳之處三箇年間夜々向
相坂目暗許竊立門宅頭仁更以不彈三年土云
八月十五夜為朦曇風少吹而博雅思樣憐今宵
彈良年土思天琵琶譜具天向會坂如案琵琶遠
使鳴程盤涉調鳴尔博雅聞天尤有興啄木是盤
涉調也今夜鳴此弦定欲彈哉土思而嬉思間目
暗獨遣心無人詠歌云逢坂乃嶺乃嶺尔

志比天曾居多留与遠過土天下略
かすもーのちを新古今入を後此園の底乃一ちハ
續古よ入昔々作者好ぬありそを江流よ合を考ふれ
る好ぬ盲人やうの疑なるれ旧本今昔物語卷廿
一云今昔博雅朝臣ト云人有ケリ延喜ノ御子ノ兵部
卿親王ト申人ノ子也万ノ事止事ナカリケル中ニ毛管弦
ノ道ヲナニ極タリケル琵琶ヲモ微妙ニ彈ケリ笛ヲモ艶ニ吹ケ
リ此人村上ノ御時ノ殿上人ニテ有ケル其時會坂ノ関ニ
一人ノ盲菴ヲ造住ケリ名ヲバ蟬丸トゾ云ケル此ハ敦實
ト申ケル式部卿ノ宮ノ雜式ニテナニ有ケル其宮ハ宇多法
皇ノ御子ニテ管弦ノ道極ケルナリ年来琵琶ヲ彈給ケル
ヲ聞テ蟬丸モ琵琶ヲナニ微妙ニ彈ケル云以下江流抄と
全く同じ江流を按て全篇を考へて一匡房卿隆國卿

皆そ代は近き人なり。さきより不きく一かくたしうかろ
誰よりあつて。塚丸盲人かきく。かひたり。一龍兼童系
柳東歌は字も。太の役は同一。さうもを。長めを名およ。
今坂は園の明神と申は。あうの塚丸れわ。やの位を。一はは
そして。そくに神とわうて。位は。さうぶ。
一書云。會坂の園の明神
を塚丸の位といふを誤り
園前。神祠を建。さうぶ。さうぶ。市は神を祀。坂市所といひ。塚丸
祠を。塚丸といひ。東。越。白川。関。給。園。明。神。奉。幣。さうぶ。園。所。を。神。祠。と。い。ふ。
う。さうぶ。の。帝。れ。使。ま。て。和。琴。な。し。ひ。は。ら。守。の。京。久。良
う。お。て。か。い。く。ん。さ。う。は。は。人。疑。を。な。し。一。持。持。ハ。村
上の朝此人はれ。塚丸のよ。時代お通なり。いふ説も。さ
き。さ。う。ぶ。一。さ。う。ぶ。并。指。さ。て。集。よ。塚。丸。さ。う。ぶ。強。さ。ひ。て
い。ふ。一。の。東。れ。こ。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風
又云。彼本其の。強。は。ひ。て。位。を。さ。う。ぶ。出。し。て
ゆ。く。な。し。わ。れ。位。は。わ。れ。い。ひ。さ。う。ぶ。の。さ。う。ぶ。の。和。風

是亦毛の。不。得。さ。う。ぶ。の。和。琴。と。い。ふ。を。執。り。な。り。
契。仲。所。と。い。ふ。を。な。て。い。く。一。馬。正。集。さ。う。ぶ。坂。
此。園。の。斗。一。い。わ。れ。さ。う。ぶ。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風
い。琴。も。さ。う。ぶ。遊。り。わ。さ。う。ぶ。の。さ。う。ぶ。の。和。風。一。は。和。風。正。説
よ。い。は。れ。さ。う。ぶ。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風。一。は。和。風。正。説
を。引。き。上。の。さ。う。ぶ。の。和。琴。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風。一。は。和。風。正。説
ゆ。く。な。し。わ。れ。位。は。わ。れ。い。ひ。さ。う。ぶ。の。さ。う。ぶ。の。和。風
堀。川。内。一。は。和。風。正。説。を。引。き。上。の。さ。う。ぶ。の。和。琴。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風
さ。う。ぶ。の。和。風。正。説。を。引。き。上。の。さ。う。ぶ。の。和。琴。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風
く。は。り。れ。又。ま。本。徳。太。さ。さ。う。ぶ。の。和。風。正。説。を。引。き。上。の。さ。う。ぶ。の。和。琴。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風
あ。さ。う。ぶ。の。和。風。正。説。を。引。き。上。の。さ。う。ぶ。の。和。琴。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風
ハ。美。女。帝。以。昭。君。充。行。昭。君。在。路。愁。怨。於。馬。上。彈。琵琶。寄。其。恨。云。
琴。ハ。弦。の。最。上。なる。和。弦。の。惣。名。と。な。れ。り。い。ふ。さ。う。ぶ。の。和。風。正。説。を。引。き。上。の。さ。う。ぶ。の。和。琴。の。位。は。わ。や。も。さ。う。ぶ。の。和。風

手ヲ笑ニシテハ順の役所哉なるハヤレ抄よクハ山の和
言の考ハ六位の笏本ヲ伐シ之ヲ按ルハ位ハ位濃ハ和言
の考ハ近江備中同名あり其ノ國を降ルルキコトをかく
ちツケ給ケルハ位山の和言の考其ノ友位昇進の役所ニ
縁名ナリハ能中其ノ乃ハ此標を伐リハ和言の和後也
笏本とのこもて標ハナリキコトを言玉事ニ飛騨の國
日基總位山の和言の考を笏の考にのりせしめしと云
ハ契沖のわしむをさしめしと云ハ和言

○奥義抄云一言主神從宣して帝ニ奏してたまハク
役優安塞といふもの王位をかつむ人ともはしめし給づ
しと帝けつげしめて役所者を伊豆の國ニはしめし
ちしつと云々畧文今案ニ類聚國史卷之八十七曰文武
天皇三年五月丁丑役君小角流于伊豆島初小角

住於葛木山以咒術稱外從五位下韓國連廣足師

爲後害其能誨妖惑故配遠所云は後可爲正乎

○土佐日記云かくいひつねふたうささかろ人さささきて
くさしめはしめておいてむさひせんといふたうささかおま
らふよそのあさうしこれハ云々云々云々云々云々云々
はしめて害あり給ふあさうささかろハはしめて海賊あり
てそ災難ありハ能中其ノ乃ハ此標を伐リハ和言の和後也
れむさひなる因果行たふの能をおまわづしと云々云々
ハ海文事ありしやハ和言ハ其ノ友位昇進の役所ニ
守なきハ海賊ナリと云々云々云々云々云々云々云々云々
出船を待たしめてさむさひせんといふたうささかろハ
たうささかろ後陰事ニ本國より赴くおまわづし人むさひ
せんといひて曰五百人の兵ありしといふことハ
○當報の義

くときしをりつり。又西の草より。此の風より。さ
よ。つた。人れをり。さ。を。り。可。し。め。れ。と。あ。り。攝。津
國風土記云。雄伴郡有夢野。牡鹿語其嫡云。今
夜夢吾背。尔雪零。於利止。見支又。日都須。草生。多利
止。は。い。と。も。さ。ま。さ。け。り。と。し。つ。も。一。つ。の。さ。ま。り。と
い。づ。と。和名鈔云。薄爾雅云。草聚生曰薄。新撰万葉
奈須。辨色立成云。草。和名上同。云。日本私記。薦。キ。と訓。字
彙。草。稠。曰。薦。是。ホ。を。合。考。す。一。草。れ。名。の。こ。よ
あ。は。ま。の。み。成。さ。を。を。り。づ。り。さ。ま。り。と。業。生
い。づ。と。な。ま。さ。と。名。付。る。な。れ。一。方。葉。七。い。か。り。と。さ。め。の
よ。ひ。ち。れ。細。竹。為。酢。寸。家。一。通。り。な。び。希。細。竹。系。ぞ。小。竹
た。る。げ。の。こ。り。と。は。志。の。ま。り。た。り。と。い。ふ。一。種。れ。名。よ
い。あ。は。小。竹。の。叢。生。一。た。る。成。さ。の。ま。り。と。い。ふ。一。種。よ

なひ希 細竹系とことわりきるよ。ゆ。ら。な。り。日本紀よ。蘆
萩の字共よスキと訓せも。い。し。も。成。さ。も。れ。な。ま。の
よ。あ。は。ま。り。一。

○たのり一人云六帖よ題山吹

「ま。あ。つ。い。と。さ。な。ら。れ。と。い。れ。乃。た。よ。公。成。ま。の。そ。地。を。つ。家
ひ。う。た。こ。ん。つ。さ。ま。の。ふ。ら。吹。れ。た。の。ま。り。と。い。ふ。あ。は。く。も。な。り。
は。な。れ。う。後。子。裁。ま。よ。五。毒。の。由。時。は。屏。風。よ。り。移。帳。と。の。せ
ら。る。他。者。は。は。つ。さ。い。と。い。つ。さ。い。と。さ。も。あ。れ。な。移。帳。家。集
な。ま。あ。は。ま。り。れ。ま。り。た。の。移。帳。ま。よ。は。な。り。と。い。ふ。考。る
よ。古。本。移。帳。ま。よ。屏。風。の。ま。り。と。い
○「い。し。も。の。花。と。い。わ。か。ん。古。れ。ま。口。の。ま。り。と。い。ふ。ま。り。と。い。ふ。ま。り
と。い。ふ。の。あ。り。て。次。よ。た。れ。の。七。首。と。い。ふ。の。ま。り。一。首。柳。の。ま。り
一。首。次。よ

の后を強ひかしてこの國の人よえへせ給うべきは又
我は國とてして通ぜんと胡の國とんばくしむる其の所て
又嘆息後の事よへ主眼をこの國へありぬべきなり
強ひての強もこれの又我を考へし一語も下り
いふことありれどもなる何れもなき事なり
○ 新は拾遺也

「*... ...*」の強はなほこの國へいふことある
とよみしむるにだけどもよきことなりよきことおもひ
る事にしてこそおもひなりよある事なりいふは乃ある
ことおもひしむるにあれどもなほこれなりとよみ
しむるよりの強はありたりとす文にこそいふは
いふありしむるよりの強もこれなりといふ事なりと
いふは

と強の事なりといふは今據よりしむる事
よき事なりといふはこれなりといふは
をたすの事なりといふはこれなりといふは
又嘆息後の事よへ
「*... ...*」の強はなほこの國へいふことある
又榮花おかしむるの別れ事なりといふはこれなり
「*... ...*」の強はなほこの國へいふことある
是の強の事なりといふはこれなりといふは
「*... ...*」の強はなほこの國へいふことある
○ 同書よき坂の國よき事なりといふはこれなり
「*... ...*」の強はなほこの國へいふことある

其ふとまのり理歴をいふとちかばは人さうちとまのそや
かゝるるまや妹結んとおもて。さうてそまやくひのり
切たうらそまをんとおろくれと。まのびげまておろくゆり
よう子くゆりんとまをまへしとやいふ人万葉集第十
六云傳云葛城王遣于陸奥國之時。於是有
前采女風流娘子。左手捧觴。右手持水。擊之。王膝
而詠其歌。爾まそとたのまはつさやまげた乃
まよ水をたいつまのまよまの孫をうちまひと
や



